

竹中幸史著

『フランス革命と結社』

——政治的ソシアビリテによる文化変容——

遅塚忠躬

フランス革命は、旧体制の秩序や統制を破壊することによって、いわゆる市民的公共圏を一挙に創出した。その結果、論議する公衆のもとでのさまざまな言説の沸騰が生じ、そのなかから、政治を左右する新しい力としての世論が形成されるに至った。このような、世論を背景にした新しい政治のあり方が、近年注目されている新しい政治文化の創造（竹中氏のいう「文化変容」）である。

しかも、革命は、アラルド法やル・シャブリエ法によって旧来の身分的・同業組合的な団体（社団ないし中間団体）を一挙に禁止したから、旧来の社団に替わって、新たに、市民各自の自発的結集の拠点たる政治結社が各地に簇生した。この、一般に「クラブ」と呼ばれる政治結社（名称は「憲法の友の会」とか「人民協会」とかさまであった）は、旧来の社団的な結合に替わる新しい市民的な社会的結合（ソシアビリテ）を集約的に表現するものであり、それが、公衆の論議の中心になり、市民的公共圏にお

ける世論形成の場になった。したがって、これらのクラブこそ、フランス革命による新しい政治文化の創造にとつて、最も大きな役割を演じたのである。

そうした政治結社の代表的なものがパリのジャコバン・クラブであることはよく知られていよう。だが、政治結社としてのクラブは、パリだけに生まれたのではなく、近年の研究によれば、最盛期には全国で六千を越えるクラブが存在したとされ、これが、革命政治を支える草の根の基盤になった。

本書は、そうした結社のなから、オート・ノルマンディの首邑ルーアン（私は Rouen の表記はルーアンの方がよいと思うが、ここでは竹中氏の表記に従う）に設置されたクラブ（一七九〇—九五五年）を取り上げて、それが地方政治および中央の政界とどのように関わったのか、そして、その活動が新しい政治文化の創出にいかなる機能を果たしたのかを、綿密に跡づけたものである。本書の副題「政治的ソシアビリテによる文化変容」は、こうした著者の狙いを端的に示したものと言つてよいであろう。

著者竹中氏の研究は、従来の研究文献と印刷史料との網羅的検討にとどまらず、ルーアン所在の県文書館および市文書館での手稿史料（とくに各種の議事録）の博搜に基づくものであつて、その史料収集 documentation はほぼ完璧に近く、史料分析の手法もたいへん綿密であり、この種の地方史研究のモデルになると言つてよいであろう。本書が、二〇〇五年度の渋沢・クロード賞受賞の榮に浴したのもまた故なしとしない。長い伝統をもつ日本でのフランス革命研究は、近年に至つて、本書のような地方史研究のレベルでも、欧米での研究に比べてさほど遜色のない優れた

成果を産み出しており（リヨンに関する小井高志氏の長大な学位論文も近く邦語で刊行の予定と聞く）、私は、本書の刊行と斯学の隆盛に慶賀の意を表したいと思う。

二

本書は、第一章、ルーアンの政治結社、第二章、政治結社のネットワークとフランス革命、第三章、ルーアンにおける革命祭典の展開、第四章、ルーアンにおける革命祭典と政治結社、という四章から構成されているが、それらの全体は、大別して、ルーアンのクラブと地方政治および中央政界との関係を考察した前半（第一・二章）と、新しい政治文化の創出においてクラブの果たした役割を革命祭典に即して検討した後半（第三・四章）とから成っている。以下では、前半と後半のそれぞれについて、内容を詳しく紹介するというよりは、むしろ、そこで得られた重要な知見を摘出するというかたちで、簡単な紹介を試みたいと思う。

まず、前半においては、一方で、ルーアンのクラブが、市議会多数を占めて市政を牛耳ったのみならず、周辺地域の諸クラブとのネットワークを通じて広範な地方政治に大きな影響力を行使したことが明らかにされ、他方で、ルーアンのクラブが、パリのジャコバン・クラブと提携することを通じて次第にパリのクラブの支配下に組み込まれ、やがてジャコバン独裁の下部機構に変質してゆくことが明らかにされた。こういう、中央と地方のいわば二重の関係を究明したことは、本書の大きな功績である。そして、この前半部分（第一・二章）において、従来の研究ではとかく開却されながら、本書ではじめて正面から取り上げられた重要な論

点は、次の二点にあると言つてよいであろう。
第一点は、『私的な』アソシアシオンから出発したクラブは、革命独裁に不可欠な『公的』機関と化した」（四〇頁）ことである。

ハーバーマスの提言以後、革命前夜における公共空間（市民的公共圏）の成立とそこの世論の誕生はいわば通説となり、革命期にはそういう公共空間と世論とがいわば人民的ないし民主的に展開したということが、いわば暗黙のうちに前提されてきた。これに對して、著者は、中央においてジャコバン独裁が確立した九三年秋以降には、ルーアンのクラブは中央権力の下請け機関になり、したがって、自由な論議にもとづいて世論を形成するような公共空間は「挫折」ないし「内部崩壊」していたのである（四〇―四一頁）。

従来でも、国民公会におけるジロンド派議員の追放以後には、公共空間が山岳派の独裁に向けて厳格な統制のもとに置かれ、各種の人民協会の肅清や弾圧が遂行されたことはよく知られていた。また、地方におけるクラブの肅清がその地に派遣された国民公会議員のイニシアティブのもとで遂行されたことも、近年の地方派遣議員に関する研究によつて、ある程度まで知られるようになった。しかし、著者が指摘しているように、「革命期の『公共空間』を実証的に取り上げた研究は意外に少ない」のであつて（三四頁）、この点を正面から論じた第一章の第四節（政治的ソシアビリテと「公共空間」）とそれに続く「小括」での著者の見解は、たいへん重要な意味をもっている。だが、この、公共空間の挫折ないし崩壊という問題は、フランス革命におけるジャコバン独裁

の成立の根拠に関する基本的な問題に運動するので、この書評の末尾であらためて取り上げることにはしたい。

前半部分における重要な論点の第二は、「ジャコバン独裁期にはクラブのネットワークが地方で拡大したものの、中央集権体制が完成したのではなく、地方の中継クラブが農村部のクラブを支配し地方政治のイニシアティヴをとっていた」(八一頁)ことである。

首都パリのジャコバン・クラブが全国に族生した地方クラブと提携関係を結び、その結果、地方クラブがパリのクラブの地方支部のような状況を呈していたことは、従来の研究でもいわば常識であった。しかし、ここでも著者が指摘しているように、パリ↓地方という一方向的な連絡に比べて、地方クラブ同士の間はこれまで看過されてきたのであって、この点に着目したことは本書の大きな功績である。そして、著者によれば、一方で、パリ↓ルーアンという関係においては、ルーアンのクラブのもつ穏健派的傾向のゆえに、中央集権を指向するパリはルーアンのフェデラリズムを警戒し続けていたが、他方で、地方クラブ同士の関係においては、共和第二年にオート・ノルマンディで爆発的に増加した末端地方のクラブに対してルーアンのクラブが強い影響力を及ぼすようになる。したがって、著者によれば、「ルーアンのような地方中継クラブの権威が増してネットワークの多元化が生じることになり」、中央集権をめざす革命政府は一種の「ジレンマ」におちいった、という(八一、二〇二頁)。このようなジャコバン・ネットワークの二重性を究明したことは、本書の大きな貢献であると言えよう。

だが、ここで、読者は一つの問題に逢着する。それは、さきの第一の論点、すなわち、ジャコバン独裁の確立による公共空間の挫折ないし崩壊という現象と、この第二の論点たる、ネットワークの多元化による革命政府のジレンマという現象とは、いかにして整合的に理解されるのか、という問題である。ごく単純化して言えば、自由な論議の場としての公共空間が崩壊してしまえばジャコバン独裁はジレンマにおちいることはなからう、ということである。われわれは、この問題を、本書全体の提起する問題との関連で、のちにあらためて取り上げることにはしたい。

そこで、われわれは本書の後半部分(第三・四章)に移ろう。ここでは、革命期の新しい政治文化の現れとして挙行されたさまざまな革命祭典が検討の主要な対象になる。著者は、一七九〇年の連盟祭から九四年の最高存在の祭典に至る四〇件ほどのさまざまな革命祭典について、祭典そのものの展開ないし変容を跡づける(第三章)とともに、祭典へのクラブの関わり方の変化をも跡づけている(第四章)。この部分における革命祭典の分析は、それぞれの祭典について、組織者・儀式的構成とシンボル・参加者の構成・行列のコースなどについてたいへん綿密なものであり、祭典の変容の過程を地方史レベルで解明したことは本書の大きな貢献であるが、ここではその細部に立ち入ることを省略して、この分析から著者が抽出した重要な論点だけを取り上げることにはしたい。

著者によれば、「革命初期には……地方の革命家が祭典組織を主導してきた」のだが、「共和二年以降、祭典組織に中央政府が強力に介入するように」なり、ルーアンは、「九三年以後、パリ

追従の姿勢を明確に打ち出していた」。したがって、「共和二年春以後ルーアン独自の祭典組織は全く影をひそめてしまう。革命祭典は、地方色という点でも、活力を失ってゆくのである」(一四六頁)。祭典へのクラブの関わり方から見ても事態は同様なのであって、「パリから発信されてくる政治文化にルーアンのエリートたちは抵抗しなかった。彼らは中央権力に取り込まれ、もしくは進んでその一部となる一方で、自分のシンボルさえも放棄したのである」という(一九〇頁)。

もともと、革命祭典は、市民の自発的で自律的な政治参加を象徴するものであり、クラブは、それら祭典の挙行を担うことによつて、市民の「政治化 politisation」に貢献するという機能を果たすものであった。だが、やがてジャコバン独裁のもとで、祭典は、市民を国民国家の一員として陶冶し教育するための手段(「自律性を失いカリキュラムをこなすだけの教育儀礼」二〇二頁)に転化する。そして、ルーアンのクラブは、こうした祭典を組織することを通じて、ジャコバン独裁を下から支える機能を果たすことになる。著者の言葉を借りれば、「結局、計算しつくされた祭典は、祭り自体を活性化する民衆のエネルギーを失わせ、地方における自律性を否定してゆく。こうして革命祭典は、その絶頂期に硬直し、死ぬのである」(二五〇頁)。

こうして、本書は、次のような結論に導かれる。「結局のところ、共和二年春以降の祭典に見られた全体一致というフィクション、予定調和的な空間の誕生は、第一章で分析した議論なき『公共空間』の誕生とバラレルな関係にある。両者は共に革命期に新たなソシアビリティを生み出したが、独裁の政治文化のなかで硬直

し、変質してしまつたのである」と(二〇三頁)。まさに私が本書前半部分の重要論点の第一として挙げておいた公共空間の「挫折」ないし「崩壊」は、本書の末尾において、「クラブ自身の自律性の放棄と祭典の硬直化」(一九一頁)に接合され、本書全体の論理はいわば円環的に完結する。

私は、著者が本書をこのような一貫した論理で描き切つたことに対して、深い敬意を表したいと思う。全体として何を言いたいのか把握しにくいような議論を展開するよりも、やや単純に見えるようにも、一貫した論理を展開して見せてくれる方が、われわれの歴史学の発展にとつて遙かに有益だと思ふからである。だが、われわれは、本書を読み終わって、われわれが今後竹中氏とともに解明すべき問題がいくつか残されていることを感じる。それらの残された問題のうちで、最も重要だと思われる問題を二つ指摘して、この書評の責めを塞ぐことにしよう。

三

残された問題の一つは、まさに、本書の前半部分における第二の重要論点に関して指摘しておいた問題、すなわち、ジャコバン・ネットワークの多元化(少なくともルーアンのような中継クラブの権威の増大によるネットワークの二元化)による革命政府の「ジレンマ」をどう理解するか、という点に関わっている。

著者は、このようなネットワークの二元化とそれに由来する中央政府のジレンマとをふまえて、本書の前半部分で、ジャコバン独裁期にも中央集権体制がけつして完成したものではないことを指摘していた。これと同様なことは、本書の後半部分における革

命祭典の硬直化ないし終末についても言えるであろう。著者は、正当にも、「地方クラブが革命に果たして役割のなかで最も影響が大きかったのは、市民に『政治化』の機会を提供したことであろう」と述べている(二〇三頁)。このような市民の『政治化』、つまり、「政治の発見」ないし「政治的文化変容」は、ジャコバン独裁による政治文化の硬直化を乗り越えて、のちの一九世紀にも生き続けることになるであろう。そのことは、著者が、本書の末尾において、正当にも、「クラブによる政治的文化変容は全く水泡に帰したの……ではない」と指摘している(二〇五頁)ことから十分に窺えるのである。

そうだとすれば、われわれは、九三年以降のいわゆるジャコバン独裁が、けつして一枚岩の強力的な中央集権体制ではなく、その内部にジレンマを抱えた脆弱な体制であったことを知るであろう。テルミドールにこの体制が脆くも崩壊したことは、その体制の脆弱性を如実に示しているのだ。したがって、われわれは、本書において指摘された革命政府の「ジレンマ」を手がかりとして、九三年秋までに確立したといわれるジャコバン独裁の中央集権体制の内部にある矛盾をさらに立ち入って解明し、そのうえで、その矛盾のよってきたるゆえんを解明しなければならぬであろう。この問題は、もちろん、著者にも意識されている。だが、私の受けた印象では、本書において、ジャコバン独裁の強力な統制機能の側面がやや強調され過ぎており、その内実の脆弱性とその包蔵する矛盾とがやや軽視されているように思われた。比喩的に言えば、絶対王政の支配が、けつして絶対的なものではなくて、ついに満たされざる欲求にとどまっていたように、ジャコバン独裁

もまた強固に確立されたものではなかったのではあるまいか。そして、絶対王政の支配の内実が、中央レベルよりもむしろ地方レベルでの研究によって深められたのと同様に、ジャコバン独裁の内実もまた、竹中氏に続くべき今後の地方レベルでの研究によってさらに深められるであろうことを期待したのである。

以上のような、今後に残された第一の問題は、ただちに、残された第二の問題に連結してくる。その第二の問題というのは、さき指摘しておいた本書の前半部分の第一の論点に関わるものである。すなわち、竹中氏が本書の第一章で明快に指摘したように、本来、市民たちの自由な論議によって世論が自発的に形成される場であるはずの「公共空間」が、「挫折」ないし「崩壊」し、私的アンシアシオンだったはずのクラブが、革命独裁を下支えする公的機関に転化したのであるとすれば、それはなぜか、という問題である。端的に言えば、フランス革命がついに独裁とテロルに帰結したのはなぜか、という問題、トクヴィルふうに言うならば、フランス革命が平等の革命であって自由の革命たりえなかったのはなぜか、という問題である。

もちろん、本書のような地方史研究のモノグラフィに対して、ジャコバン独裁の成立根拠を問うという革命史研究の中心問題の全面的検討を期待することは、そもそも無理な注文であろう。しかしながら、明敏な竹中氏は、問題の所在を十分に意識していたはずである。それだからこそ、氏は、「国民公会のみが、世論に、それが持つべき方向性を付与し、世論に、それが打ち砕くべき標的を示すのだ」という重要な史料を引用しつつ、ここに世論と権力との関係の「逆転」が明示されていることを、的確に指摘し

えたのである(三八頁)。(なお、この引用史料は、フリメール一日のデクレの条文そのものではなく、そのデクレに関して公安委員会から発せられた通達circulaireの一節であろう)。そこまで議論を進めたのであれば、さらに一步を進めて、そのような「逆転」がなぜ生じたのかを問うことを氏に期待しても、あながち無理ではあるまい。むしろ、この問題の解明は、竹中氏を含めたわれわれ全体に課せられた今後の課題であると言うべきであろう。

それでは、ジャコバン独裁の成立根拠を問うという問題を解明する手がかりは、どこに求められるであろうか。ルフエーヴルを頂点とするジャコバン学派は、四つの革命の複合体という社会経済的構造からこれを解明しようとした。しかしながら、ここでも比喩を用いるならば、階級均衡論や地主制論などのような経済構造分析による絶対王政の成立根拠の解明が不十分であったのと同様に、複合革命論によるこの問題の解明が不十分であることはすでに明らかであり、竹中氏の依拠する政治文化論からの解明がそこに付け加えられるべきであることは論をまたない。そして、いわゆる言語論的転回を経たのちの現代歴史学の立場からすれば、この問題の解明の端緒は、さまざまな当事者の言説を分析することに求められるであろう。(なお、私は、革命期における、個別の利害に対する一般的利害の優越という言説から、この問題を解明しようと試みたことがある)。

竹中氏は、そのための豊富な史料をすでに手にしているはずである。本書を一読して、私にやや不満が残ったとすれば、それは、氏の精緻な研究において、言説分析(この地方の各種の議事録や請願や地方派遣議員の公安委員会宛て報告などの史料における、コンテキストやイデオロムの分析)がやや不足していることである。本書のどの章においても、九三年におけるジャコバン独裁の成立がいわば所与の前提とされ、その成立根拠を地方レベルで問うという姿勢がやや弱いように思われるのも、この言説分析の不足によるのではあるまいか。もちろん、これはいわゆる望蜀の注文であろう。しかし、本書において遺憾なく發揮された氏の力量を以てすれば、地方レベルでの言説分析によってジャコバン独裁成立の政治文化的基礎を解明することも、けつして難事ではないであろうと思うのである。

以上、この書評においては、本書の内容の紹介よりも、そこに提示された重要な論点の指摘と、今後に残された課題の指摘とに重点を置きすぎたきらいがある。それは、ひとえに、私が本書から多くの示唆を受けたからであり、また、本書を出発点として、著者を含めたわれわれ全体が、今後の研究の深化を期したいがために他ならない。著者ならびに読者諸賢のご海容を乞うとともに、本稿執筆の機会を与えられた史学研究会にお礼を申し上げる次第である。

(A5判 一四六頁 二〇〇五年二月 昭和堂 税込三三七〇円)